
ソードマスターさとり『熱闘編』

犬兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードマスターさとり 『熱闘編』

【Nコード】

N9575Q

【作者名】

犬兎

【あらすじ】

——剣聖と剣帝。二人の鬼が交わる時、物語は動き出す。

時は政権分割の五年前。幻想幕府『新撰組』に所属する古明地さとりは新設された自分の部隊にスカウトする剣士を探し、諸国を旅していた。

そこで出会うのは、別の世界を生きた英雄たち。

戦国の大うつけ。平家を滅ぼした剣豪。そして異国の英雄王。

さまざまな物語の続きが交錯する幻想郷・・・はたして、さとりは無事に自らの仲間を見つけ出せるのか・・・？

ブログで描いていた「ソードマスターさとり」の過去編です。

歴史や伝説を東方風にして物語の中に織り交ぜていきます。ゆえに、歴史好きの方にはあまりオススメできません。

正史を無視した強引な設定が多々ありますが、それでもOKという方だけお読みください。

第一話・ソードマスター（前書き）

この作品はギャグ漫画日和『ソードマスターヤマト』とは一切関係ありません。

何故こんなタイトルになったのかは、ブログにて公開してます。話せば長くなるので割愛。

では、本編をどうぞ。

第一話・ソードマスター

幻想幕府の城下から、西に三日ほど歩いた地にある宿場町。行きかう人々や旅人たちが溢れているその場所は、活気の代償か争い事も絶えなかった。今日も今日とて、旅人たちが争っていた。

男A「このヤロウ・・・この俺とやろうってのか!？」

男B「上等じゃ! 表に出やがれ!」

刀を持った二人組が勢いよく宿を飛び出した。そして、その刹那に宿に入ろうとしていた女性と衝突する。女性はその場に転んでしまったが、男たちは意にも返さず街中で抜刀する。

女性「いたた・・・」

転んだ拍子に手をすりむいたのか、血が出ていた。そんな女性に声をかける、一人の少女。

???? 「大丈夫?」

女性「え? あ、ええ・・・大丈夫、ですけど」

にらみ合う二人の旅人。女性は心配そうに二人を見ている。大丈夫よ、と少女は答え、にやりと笑った。

??? 「刀を抜いたはいいけど、お互いに人を切ったこともない素人。——しばらく睨みあってたら、勝手な解釈をして終わるものよ」

女性「・・・え？」

彼女の言葉の通り、不意にお互いが刃をしまう。

男A「・・・人が多いな。けっ、今日はこのくらいで勘弁してやらあ」

男B「ま、岡っ引きに追いかけられるのは御免だ。——今日のところは許してやるよ」

そそくさとその場を去っていく二人の旅人を見て、呆気にとられる女性。少女はにっこりと笑っていた。

??? 「ね。言ったとおりでしょう？」

++ ++

女性の手に包帯を巻くその少女は、自らを侍であると言った。しかし、頭には変った髪飾り、纏っているのは異国の服、袴の代わり

にロングスカートをはいていて、紫色のクセ毛は結われておらず、侍と言うには程遠いでたちだ。しかし、彼女のもつ独特の雰囲気と存在感はまさしく侍。腰に刺した二本の刀も鞆の装飾の豪華さを見る限り、かなりの逸品のようなうだ。かなり腕の立つ方なのかもしれないと、女性は思う。

女性「あの・・・ありがとうございます」

包帯が巻かれた手を見、女性は笑顔で言う。

??? 「困ったときはお互い様よ・・・。そして、お互い様ついでに私もあなたに聞きたいことがあるわ」

女性「なんででしょうか？」

??? 「この女のことなんだけど――」

そう言いながら何かを取り出そうとした刹那、宿のほうから罵声が聞こえた。また何かあったのだろうかと宿のほうを見る女性。すると、その瞬間、血まみれの男が宿から飛び出してきたではないか。

女性「きゃあああっ!!」

??? 「どうしたの? 何があったの!？」

男に駆け寄る侍。しかし、男は既に喋れるような状態ではない。侍は宿の入り口に見つめる。やがて、ゆっくりと男を切り殺したものが姿を現した。長身の男だ。結われた髪は長く、彼もまた少女とは別の理由で侍とは程遠い外見をしている。

男「・・・なんだ？ 貴様は？」

「・・・それはこっちの台詞よ。武士が町民に手を挙げていいと思っているのかしら？」

少女の言葉を聴き、男は笑う。

男「この男が俺に茶をこぼしたのだ。せっかくの着物が台無しになってしまった——万死に値するだろう？」

「・・・万死に値するのは、あんたのほうよ」

彼の命は、あなたの着物よりもずっと高いわ。その言葉に、周囲がざわつく。

男「この俺がこの町の長の息子であることを知っての言葉か？」

「・・・関係ないわ。人が人を殺していい理由なんて、この世には一つしか無いのよ」

男「なら、その一つが俺を怒らせたこと・・・それでいいではないか」

そして、お前もここで死ね。男の刀は一瞬で抜かれ、一気に少女に迫った。だが、次の瞬間、刀は真っ二つに折れていた。

男「な、なんだとっ・・・!？」

少女は立ち上がり、男を睨む。その形相に、彼はたじろいだ。

男「き、貴様の顔は覚えたぞ! 覚悟しておけ!」

捨て台詞を吐いて、男はさっさと逃げていく。最初のかっこよさは何処へ行ってしまったのか、と少女は思い、そして周囲の異変に気がついた。

??? 「ふうん・・・そうか、あいつ」

適当な茶店で団子でも食べることにした少女。先の女性も何故か一緒にいる。

??? 「あいつの名前は倉田重蔵。この辺の宿場全体を仕切る商人『倉田屋』の息子ね。――趣味で、ああやって侍ごっこをしているみたい」

女性「でも、それにしては・・・周りの人たちの反応が妙でしたけど」

???「さあね、そればかりはよくわかんないけど・・・」

お団子を頬張り少女は上機嫌だが、女性はそうはいかない。あの妙な雰囲気と、あの捨て台詞。きっとよくないことが起こるだろう。

???「ねえ、お姉さんは旅人なの?　——目的地は何処かしら?」

女性「街道の先にある城下町ですよ。——そこにいる、私の友人に会いに行くんです」

???「ふうん・・・友人、か・・・」

女性「お侍様は?」

???「私は、さっき聞きそびれたけど人探しよ。まあ、その辺は後で話すとしましようか」

女性「どうかしましたか?」

女性「私とは会わなかったことにしたほうがよさそうよ」

少女はさっさとどこかに逃げていく。それを追おうとした刹那、妙な男たちがそれを阻んだ。

男「おい！　紫の髪の女がここにいなかったか！？」

女性「は、はい・・・？」

異国の服を着た、妙な侍だ、と言う。どうやら少女を追っているらしい。さあ、知りませんね、と答えると、男たちはどこかに走って行ってしまった。――どうやら、あの少女のいうとおり、そして女性の心配の通り、よくないことが起こってしまったようだ。どうか気をつけて、と女性は呟いた。

一度町を抜け、少女はさて、と呟く。まったく、面倒なことになったものだ。これでは町に宿泊することも出来やしない。どこか適当に野宿でもするか、それともさっさと次の町まで向かうか・・・。しかし、どうにも疲れている。今夜は気持ちよく布団の中で寝たい気分だ。少女はしょうがない、と呟き、その辺にあった木の上に登る。

??? 「やつの居場所は・・・あのでかい屋敷か。――めんどろね」

しかし、奴を倒しておかなければ今日の宿は無い。ため息一つ、少女は屋敷に向かうのだった。

屋敷に到着すると、門の前に妙な人ばかりが出来ていることに気づく。いったいなんなのだろうか、遠くからそれを見ていると、どうやら門番と誰かがもめているようだった。

女性「あの女の子をどうするつもりなのですか!？」

男「うるせえな! アニキの命令なんだ! 二度とアニキに楯突かないようにしてやるんだよ!」

女性「あなたたち・・・恥ずかしいとは思わないのですか!? 小さな少女を大勢で・・・っ!!」

よく見れば、あれはさっきの女性ではないか。それに、男たちは小さな女の子を囲んでいる。いったい何があったのだろうか、と考える前に、少女の体は動いていた。

男「うわっ!？」

女性「あ、あなたは・・・っ!？」

??? 「いい歳して。女の子をいじめていいと思ってるのかしら?」

男「てめえは!? へっ、探す手間が省けたぜ!」

??? 「そうね、私も手間が省けそう」

屋敷の中を探し回らなくてもあなたを倒せるわ。少女は余裕を含んだ笑みをこぼし、刀を抜く。男は一気に切りかかる。力任せに振るわれたその刃は一撃で粉碎した。

??? 「バカね。素人かしら？」

男「な、んだとっ!？」

刀は斬る物よ、とさとりは言う。そして、男が持っている折れた刀めがけて刃を振るう。ぎん、と金属音がして、男の刀は柄だけを残して地面に落下した。

男「・・・ば、化け物かつ!？」

??? 「まあ、化け物かもね」

私は妖怪よ、と少女は言う。そして、男を蹴り飛ばし、門を刀で切り払った。木製の門は容易く真つ二つになり、そのまま倒れる。屋敷の中には、かなりの数の敵がいる。その風貌から察するに、ただの町民でないことは確かである。

女性「あのような者たちを雇っていたのですか・・・っ!」

??? 「ほら、下がちなさい。——巻き添えくうわよ!」

刀を下段に構え、少女は一気にその中に突っ込んでいく。迫り来る敵を相手に、少女は一切恐れることはない。邪魔だ、と叫び、男たちをなぎ払うその姿はまさしく鬼神の如く。初めて出会った時の

あの優しさは一切無い。

男「な、何だコイツ!? 強すぎる!」

男「逃げろ! 勝ち目は無いぞ!」

?? 「貴様ら! それでも男かつ!」

??? 「出たわね、倉田重蔵」

重蔵「貴様の正体は調べさせてもらったぞ。――新撰組一番隊『古明地さとり』・・・幻想幕府の武士が何故ここにいる?」

女性「幻想幕府・・・っ!?!」

さとり「・・・いかにも、私は古明地さとりよ。――ここにいる目的は、ただの人探し。・・・そして、そのついでに、あんたみたいな悪人を倒して回っているのよ」

重蔵「ふん。この私が何をしたというのだ?」

さとり「罪もない町民を殺した、その罪を、その身で償いなさい」

重蔵「・・・出来るものなら、やってみろ!」

そう言った刹那、さとりの背後から叫び声。振り返ると、女性が男に捕まっているではないか。男は刃物を女性に向け、動くなよ、とさとりを脅す。

重蔵「刀を捨てろ。古明地さとり」

さとり「……呆れた。本当にプライドってものがないのね」

重蔵「おとなしく従えっ！」

女性「私のことは気にしないで！ 早くその男を倒しなさい！」

さとり「……お断りよ」

さとりはそう言って刀を捨てる。重蔵はそれを拾い上げ、鞘から抜いた。美しい刀身に、ほう、と息を漏らす。

重蔵「さすがは新撰組。いい刀を持っているな」

さとり「汚い手で触らないでもらえるかしら？」

その言葉に重蔵は黙れ、とさとりは刀を振るう。だが、その刃はさとりを捉える事は無かった。勢いよく振り下ろされた刃は地面に刺さり、その刹那、さとりが峰を踏みつける。刀を抜こうとした重蔵はそれよりも早く刀を踏んださとの勢いに負けて体制を崩す。その刹那、さとの脇差の柄が重蔵のみぞおちに直撃した。そのまま脇差を投げつけて、女性を捕らえていた男の顔面に直撃させる。そして刀を拾い上げると、すぐさま男に切りかかった。

さとり「女を盾にするなんて、愚の骨頂よ」

反撃に出た男の武器を一撃で粉碎し、男を殴り飛ばす。そして、

ようやく立ち上がった重蔵を見、さとりはもう仲間はいないわよ、と言う。

重蔵「・・・役立たずどもめ」

さとり「もとよりただの浮浪者。腕を期待するほうがおかしいじゃない？」

重蔵「その通りだ。——こうなったら俺も本気で行かせて貰おうか」

重蔵は刀を手に取り、抜刀する。さとりは息を吐き、刀を構えなおす。そうして、二人のにらみ合いが始まった。

重蔵「さあ、どこからでもかかってこい！」

さとり「……………」

重蔵「どうした！？ 俺が怖いのか！？」

さとり「……………」

重蔵「なら、俺から行くぞっ！！」

走り出す重蔵。だが、その刹那、さとりは反対方向にいた。

重蔵「なにっ！？」

さとり「どこからでもかかってこいって言ったわよね？」

重蔵の背後に立っていたさとりは、バックステップして彼とすれ違い、その瞬間に彼の刃を両断した。まだやるかしら？ と刃を向けるさとりは、重蔵はついに膝を折った。

重蔵「・・・畜生！ なんなんだよお前！？」

その時、女性はある噂を思い出す。

女性「聞いたことがあるわ。―――幻想幕府に、あらゆる剣を見切り、姿無く相手を討つという伝説の剣豪がいるという話・・・」

重蔵「ま、まさか・・・っ!？」

女性「あの子が、そうなの・・・？」

二人の言葉に、さとりは笑顔で答える。

さとり「はい。ご察しの通り『剣帝』ですわ」

その日さとりは結局、まともな宿は取れなかった。その代わりに、目的地であった西の城下町への馬車を出してもらえることになった。

女性と一緒にその馬車に乗り、さとりは手間が省けたわ、と上機嫌だ。

女性「まさか、あなたがあの『剣帝』だとは思いませんでしたわ」

さとり「ああ、その呼び方はやめて頂戴。さとりでいいわ。お姉さん」

そこまで言ったとき、さとりは何かを思い出したのかポケットから何かを取り出した。

さとり「ああ、そうだった。——この人を探してるのよ」

それは幻想幕府の手配書だった。赤い髪の猫耳少女だ。女性が知りませんわね、と答えると、さとりはそうかあ、と落胆した。

女性「その人、何者なのですか？」

女性の疑問に、さとりは真剣なまなざしで答える。

さとり「彼女の名は火炎猫燐——『炎の剣客』よ」

これが、女性とさとの出会いだった。そしてこの出会いが、剣帝と悪魔を引き合わせることになるのは、まだ誰も知らない……。

幻想幕府よりもはるか西の地。近江国の山の中に巨大な城があった。歴史において安土城と呼ばれたその場所は、幻想幕府の將軍すらも恐れる悪魔が住んでいた。

侍「ぎゃあああっ！！！！　お、お許してください！　信長様！！！！」

血まみれの男の前に立つ、一人の剣士。刀を構え、ためらいもなくそれを振り下ろす。

信長？「ふん・・・役立たずが」

信長？「やはり、我が軍にはもっと相応しい兵が必要だな」

第一話・ソードマスター／了

次回予告

戦国武将、織田信長。

その者は死してなお、何一つ変わらない。

信長「さあ、黙って俺のものになれっ!!」

さとり「・・・なんなのよ、この化け物はっ!!」

次回、ソードマスターさとり「熱闘編」・第二話

『御前試合』

剣聖と剣帝。二人の鬼が交わる時、物語は動き出す。

第二話・御前試合

馬車はゆつくりと峠を進んで行く。道は切り立った崖。ひとつたび道を誤れば命は無い。さとりは崖下に見える城下を眺め、そして山の上にある巨大な城を見上げた。

幻想幕府の西に存在する近江の国は、歴史の中にあるような近江とはまるで違う。特に安土城のある、この安土の山は人々が暮らす一大拠点と化していた。

戦国の世ならば、大名のお膝元は戦争の中心地——修羅の巷だったが、太平の幻想郷であれば話は別である。妖怪や山賊たちから逃れるようにして、人々は皆、有力な大名や武家の近所に住みたがる。それゆえに、この安土の山のふもとには、城を取り囲むようにして、巨大な町が作られていた。

さとり「まるで、ケーキの上に蠟燭が一本立っているようね」

さとの言葉に、女性は笑う。

女性「火も灯っていますしね」

ソードマスターさとり・第二話

『御前試合』

豪快で、それでいて繊細。天下統一に迫るその栄華を映し出す豪華さと優雅さを兼ね備え、さらには異国との文化の融合までも成しえた、まさに彼の人生そのものを現しているようだ。——さとりはその巨大な城を見上げ、感嘆の息を漏らす。

さとり「これが・・・安土城・・・」

城門前には門番が二人立っている。女性はすぐさまそこに向かい、なにやら話をしている。さとりもそこへ向かうと、ちょうど話が終わったのか、門が開いた。

兵士「では、ご案内いたします、さとり様」

さとり「え？」

女性「城主が会いたがっているらしいですよ。——では、私はこれで」

女性はそそくさと別の方向へ向かっていく。——安土城の城主は、戦国の悪魔と呼ばれる戦国大名・・・織田信長。

さとり「ちょ、ちょっと待って！ やだ、会いたくない！！」

兵士「そう言われましても・・・さとり様を連れてこいとのご命令
でして・・・」

さとり「お断りよ！ 妖怪すらも恐れる戦国最凶の悪魔なんですよ！？」

兵士「だからこそです！ 連れて行かないと私の命が危ういんです！
縄で縛ってでも連れて行きますよ！！」

命がかかっている奴は強い。結局、兵士の死に物狂いに押され、
泣く泣く信長に会うことになってしまったのだった・・・。
バカと煙は、というやつなのか、彼は安土城の最も高い場所、天
守閣に住んでいるという。長い階段を登り、たどり着いたその先に、
その者はいた。

信長？「おお、来たか。待っておったぞ」

長い黒髪はポニーテール。額には鉢金。漆黒の胸当ては大きな膨
らみを覆い、袴ははいていなかった。どこからどう見てもさとりの
知っている織田信長ではない。しかし、部屋の中を見ると紅のマン
ト、鉄砲、西洋の剣・・・確かに彼を思わせるものがあるにはある。

さとり「あなたは・・・？」

信長「俺か？　俺の名は織田信長。この世界の頂点に立つ者だ」

名乗ったよ。自ら。これはもう認めるしかない。どうやら、この目の前にいる巨乳の長身美人が織田信長らしい。しかし、どこからどう見たって女性だ。

さとり「ええっ！？　で、でも・・・あなた・・・」

女でしょう？　と訊ねるさとり。当たり前だ、と答える信長。

信長「お前には、この体が男のものに見えるのか？」

やはり、女性だったようだ。さとりはいったん深呼吸し、なぜ、と問う。私の知っている織田信長は男で、あなたのような女性ではない、とさとりは早口で疑問を口にした。しかし、信長は、はっは、と笑っている。

信長「それは、お主の知っている歴史のことだろう。しかしな、世界は広い。この世界のどこかには、俺が女で、こうして幻想郷で国を治めていることもあるう」

さとり「・・・パラレルワールド、か」

聞いたことがある。この世界には平行して存在する別の世界があ

るという話だ。そこでは、この世界とは違う別の物語が存在し、自分自身のありようも存在する意味も違うのだという。ゆえに、その中には織田信長が女である、という別世界が存在しているもおかしいということだ。

信長「それにしても、お主は貧相じゃな」

さとの胸を見て、信長は笑う。それに気を悪くしたさとりは、む、と唸り信長の胸を見て、でかけりゃいいってもんじゃないですよ、と反論した。

さとり「女性の胸は美しくなきゃね」

信長「ほう・・・それは俺にケンカを売っているのか？」

さとり「別に、殿方に気に入られなければ胸なんてあってないようなものだって言いたいだけですわ」

信長「しかし甘いな。美しさでも負けてはおらんぞ。――ほら」

そう言ってこれ見よがしに見せ付けてくる。さとりはうぐ、と唸り、そして参りました、と残念そうに呟いた。信長は上機嫌。

しかし、そこに一人の女性がやってくる。美しい着物を着た女性だ。その姿には見覚えがある。――そう、さとりと共にここまでやってきたあの女性ではないか。

女性「信長様、何をしておられるのですか、はしたない」

信長「はっは。なに、さとりが俺の胸をどうしても見たいとせがむものでな」

さとり「誰がじゃ!!・・・それより、こちらの方は?」

信長「おお、紹介がまだだったな。――こいつは俺の嫁だ」

さとり「ええっ!?　じゃあ・・・まさか、濃姫さまっ!?」

濃姫「ええ、まあ。一応は、そういうことです」

さとり「あー・・・ひ、姫とは存じ上げず大変失礼を・・・」

濃姫「いいんですよ。それに、これまで通り自然に話をしてください。さとりさんに畏まられるとこっちまで緊張しちゃうわ」

さとり「じゃ、じゃあ・・・遠慮なく」

信長「なんだ?　知り合いだったのか?」

濃姫「倉田の宿場町で少々もめごとに巻き込まれまして。その際に、さとりさんに命を救われたのです」

その言葉を聴いて、なんと、と信長は驚いた。

信長「それは大儀であつたな。——かくいう俺もあの倉田には手を焼いていたのだ。幻想郷ではあまり戦も起こせぬゆえ、こやつに探りを入れさせておつたのだが……まさかお主が倒してしまうとはな」

これは褒美の一つでも渡さねばならぬな、と信長は言う。そんなものために戦つたわけじゃないわよ、とさとりは言う。その言葉を受け、信長はいい心がけじゃ、と上機嫌に笑った。

信長「今宵は宴を開こう。——さとりよ、今日はこの城でゆつくりとくつろいでいけ」

さとり「では、お言葉に甘えさせていただきます」

よし、決まりだ。信長は兵に宴の準備をするように命じる。そして、思いついたかのように、そうだ、と呟いた。

信長「さとりよ。——お前は腕に覚えがあるようだが、どうだ？ この俺と戦ってみないか？」

さとり「……はい？」

信長「御前試合というやつだ。どうだ？」

いきなりの提案だった。しかも御前を相手にする御前試合など、前代未聞だろう。さとりが答えを渋っていると、じれったいやつだ、

と信長はイライラし始め、結局、さとりの答えも聞かずに彼女を屋外に連れ出したのだ。

信長「さあ、やるぞ！　かかってこい！！！」

信長は西洋の剣を手にとって、ぶんぶんと振り回す。しかし、さとりは刀を抜いたものの、どうにも動かない。

信長「どうした？　こないのか？」

さとり「・・・行かないんじゃない、行けないのよ」

そう。別に気が乗らないだけではないのだ。明らかに隙だらけ——に見える信長だが。さとりには見えていた。どんな風に攻めても、こちらがやられてしまう未来が。あの何てこと無い雰囲気の中に、どんなことをしようとも無駄だと言い放つような、異様な殺気めいたものがある。

さとり「・・・っ！？」　なに、この音・・・？」

心を読もうとしても、何も見えない。それどころかこちらの思考を妨害するノイズが走り、さとりはめまいを覚えた。やはり、戦国最凶の名は、伊達ではないということなのか。

信長「来ないのなら、こちらから行くぞ！！」

信長「爆、壊っ！！！！」

信長は剣を空高く掲げ、一気に地面に叩きつける。その刹那、地面は大きく揺れ、大地から岩の槍が飛び出したではないか。大きく跳躍し回避するさとりに、さらに追撃。横に薙ぐようにして振るわれた剣の先端には炎。それがとんでもない速さでさとりに直撃したのだ。

信長「炎熱！！　そして、とどめの——っ！！！」

剣を回転させ、竜巻を起こす。一体どうしてあんな力を持っていたのか・・・さとりが考える前にその一撃は彼女に直撃していた。

信長「烈風剣——っ！！！」

膨大な力がさとりの細い体にぶつかり、一気に弾き飛ばされる。一切の隙も無く、心も読めず、そして正体の知れない謎の力。その圧倒的な力を前に、さとりは成す術なく敗北したのだ。

信長「なんだ。剣帝といっても、たいしたものではないのだな」

薄れ行く意識の中、さとりは思い知る。これが戦国の大うつけに
して、最凶の戦士、織田信長か、と。

さとり「・・・とんだ、化け物も、いたものね・・・」

十
十
十

しばらくして、さとりは意識を取り戻した。目を開けて、一番に見たものは、かわいらしい少女。さとりは膝枕をしていたその少女はさとりが目を開けると、気がつかれましたか、と優しい笑顔になる。

??? 「信長様にやられたのでしょうか？ あの方は手加減を知りませんから」

ぱっと、少女の周りに花が咲いた———ように見えるほどのかわいらしさ・・・いや、実際に彼女の周りには花が咲いているではないか。一体なんなのだろうか、とさとりは起き上がる。よく見れば、その花は幻覚のようで、実際のものではないようである。まじまじとその少女を見つめ、あなたは何者かしら、と訊ねた。

??? 「申し送れました。私は———」

信長「おい、お蘭。さとりは目覚めたかー？」

信長が部屋に入ってくる。そして起きていたさとりを見て、回復は早いのだな、と笑っていた。

さとり「なんなのよ。あなたは。――妖怪でもないくせに能力を持ってるなんて」

信長「幻想郷暮らしが長いゆえ、これくらいの力は持っているさ。それに、正確に言えば俺も人間ではないからな」

さとり「あら、そうなの？」

信長「俺は死してから幻想郷にやってきた死人。――そこにいるお蘭も同じく死人だ」

お蘭、と呼ばれた少女は、あはは、と笑う。

お蘭「はい。実はそうなんです。だから、正確には私たちも妖怪なんですよ」

さとり「なるほど・・・だからあんな能力を持ってたわけね」

お蘭「信長様の力はすばらしいですよ。どんな妖怪でも大名でも、今の信長様には敵いません」

信長「はっは。その通りだ」

得意げに信長は言う。しかし、さとりはそんなことよりも、このお蘭という少女が気になっていた。

信長とおそろいのポニーテール。美しい色合いの着物。小柄で、可憐なその姿。そして、彼女の後ろに咲いている色鮮やかな花――の幻覚……。そして「おらん」という名……。

そう、信長といえば、あの噂。

さとり「森蘭丸!？」

お蘭? 「……はい?」

さとり「やっぱり! あなた、森蘭丸でしょう!？」

蘭丸「……え、ええ……そうです、けど?」

信長「ほう、お蘭のことも知っておったか」

さとり「そこそこ有名よ。あなたと蘭丸のことは」

まあ、実際には、そういったことを話題にしては盛り上がる特殊な趣味を持った戦国女性の妄想が広まっただけのことなのだが……。しかし、どうやらこの世界の二人は、妄想話の中では終わらない関係だったらしい。不意に、信長が蘭丸の顔に触れ、唇を重ねたのだ。

蘭丸「ちょ、ちょっと……信長様……。さとり様が見えますよ?」

信長「いいではないか。――それに、見られていたほうが、お主

はよいのではないか？」

蘭丸「そ、そんな・・・こと、はっ」

蘭丸の首筋を舐め、信長は妖しく笑う。蘭丸の後ろに周り、彼女の着物の中に手を入れる。蘭丸の体は小さく反応し、息が漏れる。

蘭丸「んっ・・・信長様あ・・・」

信長「さとりよ、よく見ておけ」

さとりの顔はすっかり真っ赤になっている。まさかこんなものを見せ付けられるとは思ってもしなかった。第三の瞳からは蘭丸の心が嫌というほどに流れ込んで、さとりの熱をさらに高めて行く。蘭丸の後ろに見えていた花の幻覚も、さらにその密度を増し、漫画のひとこまのような世界観を醸し出していた。そして、ついに信長は蘭丸の着物を捲り上げた。

信長「ほれ、ご開帳」

さとり「あら、かわいい。——あったかそうなお帽子ね」

蘭丸「あ・・・い、いやあああああっ！！！！」

蘭丸はすぐにすそを戻し、さとりに背を向けた。——そう、蘭丸は昨今でいうところの男の娘というやつだったのだ。

さとり「男だったの、あなた？」

蘭丸「は・・・はい・・・」

さとり「でも、何でそんな格好を・・・？」

信長「それは俺がやらせている。——この格好のほうが似合うだろう？」

さとり「あんたの命令じゃ、逆らうわけには行かないか・・・」

蘭丸「ううう・・・酷いです、信長様・・・」

泣いている蘭丸をよそに、楽しげに笑う信長。やはりこの男——いや、ここでは女か・・・は悪魔だ。

信長「宴が始まるぞ。さっさと来い」

そう言って、さっさと出ていく信長。残ったさとりと蘭丸は気ま
ずい空気になっていた。

蘭丸「・・・あ、あの・・・このことは」

さとり「あー・・・大丈夫。控えめなぞうさんのことは誰にも言わ
ないから」

蘭丸「・・・すみません。あんな城主で」

さとり「いやいや、いいのよ。——それよりも、あなたこそあんな
城主の元で働いていて、辛くないのかしら？ 幻想郷には他にも
たくさんいい主がいるでしょうに」

蘭丸「・・・まあ、生前からあの人と一緒にいますからね。他の人
の元で働くことなんて考えてもいなかったですよ」

さとり「・・・ふうん。偉いわね」

蘭丸「それに、あの人と一緒にいると楽しいですから」

再び、彼の後ろに花が咲く。男だと分かっていても、このかわい
らしい笑顔は濁らない。あんなことがあってもまだ曇り一つも無い
この人物——これは、本物だ、とさとりは唸りながら目を細めた。

さとり「・・・天子以来の、アレね」

蘭丸「なんですか？」

さとり「なんでもないわよ」

十
十
十

黄昏時の安土城は、紅に燃える蝋燭の火のようだった。

宴は、盛大に始まり、そして大いに盛り上がった。

近隣の住民たちや、山の中に住んでいる家臣、城に住む信長の家族。身分や家柄など関係なしに歌い、踊り、騒ぐその姿はまさに幻想郷ならではのいい風景だ。

しかし、その宴も、信長のとある質問によって終わりを告げる。

信長「ところで、お主は何をしにこの近江まで来たのだ？」

さとりはこの女を捜しているのよ、と手配書を見せる。信長はそれを見て、ほう、と興味なさげに返事した。

信長「ただの犯人探しか。興味ないな」

さとり「ああ。それは違うわ。——この子を探している理由は、彼女を新撰組にスカウトするため」

信長「新撰組・・・？」

さとり「彼女の名前は火炎猫燐。噂に名高い『炎の剣客』よ。彼女が、この近江に潜んでいるという噂を聞いて、私は来たの」

信長「炎の剣客・・・だと？」

信長の雰囲気が変わったのを見て、周囲がざわついた。そして、彼女は不意に立ち上がると、腰に携えていた西洋の剣を抜き、地面に突き刺した。

信長「宴は終わりだ！　これより出陣する！」

さとり「な・・・っ？」

信長「それと、この女を牢に捕らえておけ！」

さとりを片手で持ち上げ、兵士たちの中に放り込む。そして信長は妖しく笑った。

信長「炎の剣客・・・この俺の求めていた兵が、まさか我が領地に潜んでいたとは」

さとり「信長！　あなた、まさか!？」

信長「さとりよ・・・炎の剣客はお主には渡さん！　火炎猫燐は、俺のものだ!！」

信長は笑う。彼女を睨みつけているさとりを見下ろして。

信長「お主は指を銜えて見ておればよい」

刀を奪われ、腕を拘束されるさとり。しかし、その間も信長をじっと睨みつけていた。

さとり「信長・・・覚悟していなさい」

最後に笑うのは私よ。さとりの言葉など一切聞いていない信長は、

さっさと出発してしまう。それを見送ったさとりは、ふ、と呆れたように笑い、そして兵士たちを見る。

さとり「さあ、今夜のお宿はどこかしら？」

第二話・御前試合　／了

次回予告

世捨て人、火炎猫燐。

その者、一太刀で天すらも焼き落とす、炎の剣客。

信長「さあ、黙って俺のものになれっ!!」

お燐「・・・あたいの炎は、ちよいと熱いのさっ!!」

次回、ソードマスターさとり『熱闘編』・第三話。

『炎の剣客』

剣聖と剣帝。二人の鬼が交わる時、物語は動き出す。

第二話・御前試合（後書き）

巨乳の信長様・・・。

そして男の娘な蘭丸・・・。

そう、幻想郷は何でもありません。

次回で近江編は完結予定・・・はたして、さとりは信長に勝てるのか・・・？

初登場キャラまとめはブログにて公開します。
では、次回もよろしくです。

第三話・炎の剣客

近江の国の西の果て。巨大な湖のほとりに、彼女は住んでいた。人里離れたその場所に一人住む少女の名は火炎猫燐。幻想郷西部にて知らぬものはいないほどの剣豪であり、そして、突如として姿を消した謎の人物でもある。幻想幕府は西で着々と勢力を拡大している討幕派の仲間に入ったのではないかと彼女を追っていた。

しかし当の本人は、まさか自分がお尋ね者になっているとは知らず、一切身を隠してなどいない。人のいない場所に住んでいる理由も、単にやたらと構われたくないという猫の性分からだ。人肌恋しくなれば、その辺の人里にも普通に姿を現している。

お燐「うーん・・・今日は何をしようかなあ」

洗濯物を干し終えたお燐は、体を伸ばしながらそう呟く。今日は天気もいい。久しぶりに屋根の上で昼寝でもしようか、と思っていたその矢先、人の気配がして振り返る。

黒髪の女性と少女。――一人は真紅のマントと巨大な西洋剣。そしてもう一人はなにやら花が咲いている。

お燐「あんたたち、何者なのさ？」

尋ねるお燐に、女性――織田信長は知れたこと、と返す。

信長「さあ、黙って俺のものになれっ!!」

ソードマスターさとり『熱闘編』

第三話…炎の剣客

呆氣にとられるお燐。あまりのバカらしさに言葉も無かった。しかし、この者は自分の平穩を乱そうとしているということだけはよく分かった。お燐は一度深呼吸し、嫌なのさ、と笑顔で答えた。

お燐「あたいはもう誰のものでもないのさ」

蘭丸「・・・らしいですよ、信長様」

信長「そうでなければ面白くない。――やはり障害があってこそ燃えるものだ」

信長は刀を抜き、お燐に向ける。しかし彼女は一切動じるところか、腰に携えた小太刀に触れることもしなかった。

信長「抜かんのか？」

お燐「あんたら相手に剣を抜くまでも無いのさ」

その言葉に信長は上等、と叫ぶ。そして刃から炎を発生させた。

信長「炎熱っ！！」

炎の斬撃がお燐に一直線に向かっていく。お燐はそれを軽々とよけ、そして右腕から炎を放つ。

お燐「あたいの炎は、ちよつと熱いのさっ！！」

信長の炎とは比較にならないほど、巨大で圧倒的な熱量。さすがの信長もあまりの実力差に驚きを隠せない。だが、信長の武器は炎だけではない。彼女が刃を地面に突き立てると、足元からは巨大な岩の壁が現れた。それで炎の進路を防ぐと同時に今度は回りこんでお燐に接近した。

信長「烈風剣！」

竜巻を纏う刃。だが、それもお燐には通用しない。烈風剣の隙間を縫って、お燐は空中に回避したのだ。

信長「なにっ!？」

そして振り下ろされるお燐の鋭い爪。

お燐「もらったのさ!」

信長のマントを爪で引き裂く。炎を纏った爪は鋼の胸当てすらも容易く粉碎し、彼女の胸に傷を入れた。だが、それをそのまま突き立てようとした刹那、お燐は真横を通った一陣の風に大きく身を引く。

信長の傍らには、自らの身長と同じくらいの長さの日本刀を構えた蘭丸がいる。その姿を見て、お燐は呟いた。

お燐「・・・とんでもない、隠し玉だね」

——セオリ―通りの剣術に縛られない異端の剣士。かの有名な物干竿以上に常識知らずの長刀を片手で軽々と振り回し、左手には小太刀まで持っている。あの剣にくわえて二刀流——どうやら相当の豪腕らしい。

信長「余計な真似をしてくれたな」

蘭丸「申し訳ございません。――ですが、危険かと思いましたゆえ」

信長「まあいい。――後はお主に任せるとしよう」

蘭丸「分かりました」

蘭丸はゆっくりとお燐に近寄る。お燐もそれに合わせて彼女に接近した。そしてお互いに必殺の距離となったとき、お燐の足元に火が灯る。

蘭丸「っ!？」

お燐「フレイムキャットウォークっ!!」

刹那に四速歩行に切り替えたかと思えば、鮮やかなステップで蘭丸とすれ違う。彼女が進んだ道には炎が残り、そして一気に火柱となって蘭丸を取り囲んだ。

蘭丸「――真空剣!」

巨大な刃を真横に振り、周囲に風を巻き起こす。炎に隙間を作り、そこから脱出を図るも、お燐にはそんなことはお見通し。出てきた刹那、彼女の飛び蹴りを食らうことになる。

お燐「なんだい? その剣は見掛け倒しかい?」

蘭丸の頭を掴み地面に叩きつける。そして、彼の頭を踏みつけ、手に炎を宿した。だが、信長は一切動かない。

お燐「とどめっ!!」

その刹那に、お燐の立場は逆転した。お燐の足などお構いなしに、蘭丸が立ち上がったのだ。その勢いにバランスを崩して転倒したお燐。そして、目の前には額から血を流した蘭丸。空ろな瞳をし、なにやら足元がおぼつかない様子だ。荒く息をし、お燐をじっと見ている。

信長「お蘭の本気は、流血してからじゃ」

蘭丸の周囲に咲いていた花が、一斉に彼の額の傷口に集まってくる。それはまるで蘭丸の頭に活けられた花のよう。彼の血を吸っているのか、花びらは見る見るうちに紅く染まっていく。そして、その刹那、蘭丸の様子が豹変したのだ。

蘭丸「――さあ、殺すぜエ――っ!!」

お燐めがけて大刀を振るう。その勢いはこれまで以上に鋭い。とっさに飛び上がり、空中で一回転して着地する。地面には巨大な刀傷。もしもあれに当たっていたら真っ二つだっただろう。

お燐「・・・花に意識をのっつけられている？　それとも、血を見て興奮するタイプとか」

信長「その両方じゃな。お蘭の咲かす花は人を興奮させる作用がある。そして、お蘭は痛みを感じれば感じるほどに感覚と神経が研ぎ澄まされる生粋のDMじゃ。――ゆえに、傷つけば傷つくほどにその強さは増していく。そして、血を吸い上げた花は、より強い興奮作用をお蘭にもたらす」

その結果が、今のお蘭じゃな。信長は笑う。自分自身で自らの首をしめたお燐の愚かさに。

信長「実力もない奴が我が軍門におるとは思っておるまい？」

お燐「・・・このお！！」

炎の爪で蘭丸に迫る。しかし、蘭丸の反応速度は先ほどとは比べ物にならないほどに向上しているではないか。そして、一瞬の隙を突かれて、ついに蘭丸の刃がお燐を捉えた。とっさに刀の動きに合わせての回避を試みるが、それも間に合わず、僅かにかすってしまった。胸の少し下にうっすらと血がにじみ、お燐は苦悶の表情を浮かべた。

お燐「あー。いっそ食らっとけばよかったのさ。――このくらいの傷が一番痛いんだよねえ・・・」

傷口に触れて炎で傷口を焼く。強引な止血に信長は笑っていた。

信長「そのような体では、お蘭には勝てんぞ」

ああ、そうだね。お燐も答える。そして、ついに小太刀を抜いた。

お燐「・・・ホントならちゃんとした剣で戦いたいもんだけど、待ってくれるような優しい子じゃないみたいだしさ」

蘭丸「――さあ、本気できやがれっ！」

お燐「いいのかい?　――本気で行っても?」

その判断、後悔するのさ。お燐の刃は炎を宿す。そして次の瞬間。その炎は天を切り裂いた。

さとり「ふむ・・・すっかり夜も明けたわね」

遡ること数時間前、さとりは安土城の城門前にいた。さとりに面会したいとやってきた濃姫が、一緒に連れてきた女中とさとの服を交換させ、彼女を脱出させたのだ。

濃姫「それで、信長様を倒す手段は見つかったのですか？」

さとり「うーん・・・それがねえ。正体の掴めないものに対策を立

てられるほど甘くないのよ」

さとり「そうだ、濃姫さま。あなたは信長の能力の正体を知っているんじゃない？」

まあ、聞いたところで分かってはいるのだが。さとりの予想通り、濃姫も知らない、と答える。

濃姫「信長様は昔からろくでもないことをするお方でした。——それによって犠牲になるものも少なくありません。だからこそ、今回は止めたいのです。今、近江には、彼女を止められるお方がいるのですから——さとりさん。彼女にお灸を据えてくれますか？」

さとり「……何の根拠もなく期待されてもねえ」

まあ、情報くらい自分で仕入れるわよ。さとりは言い、そして服を脱ぐ。

さとり「それで、代わりの服は？」

濃姫「ないわよ」

さとり「……はい？」

帯を落とし、前がはだけた着物姿で彼女は呆氣にとられる。なん

と、この服しかないというのだ。

さとり「ちょっと待ちなさい！　こんな着物着てどうやって戦えっ
ての！？」

濃姫「すみません。――私もあなたをここから脱出させることだ
けに気を取られていました・・・」

さとり「・・・しかたない。それもあいつに頼むか」

さとりは濃姫が隠し持っていた刀を受け取ると、さっさと走って
いく。濃姫は彼女の背中を見つめ、不安げな表情を浮かべていた・
・。

山道を走って下るさとり。その途中で彼女は空に向けて弾幕を放
つ。それが、さとりと彼女の秘密の連絡手段だった。数秒もしない
間に、その少女は空を飛んで、さとりのところまでやってくる。

漆黒の翼を持ったその女性の名は射命丸文。幻想幕府新撰組の二
番隊に所属する彼女は、幻想郷を巡っては討幕派の動きを探る密偵
役だ。そして、さとりとは新撰組発足前に何度も共に競い合った仲
であり、今でも親しい間柄だ。

文「さとりさん。どうかしましたか？」

さとり「早いわね。相変わらず」

文「今回はたまたまですよ。ちょうど近江で密偵を行ってまして」

あの織田信長が倒幕派に加勢するのではないかという噂がありまして。文の言葉にあいつならやりかねないわね、とさとりは笑う。

文「それで、何の御用でしょう？」

さとり「織田信長の能力について何か知らないかしら？」

知ってますよ、とあっさり答える。そして、メモ帳を取り出してばらばらとページをめくっていく。

文「ありました。——ええ、っと。信長の能力は『—————

お燐「空を焼く、紅蓮の炎！」

高々と掲げられた小太刀から、炎の翼が生える。そして、それは空高く舞い上がり、次の瞬間、一気に蘭丸めがけて急降下したのだ。

お燐「あたいの全身全霊！ 受けてみるのさっ！！」

炎の翼は蘭丸に突進し彼の体を上空まで吹き飛ばす。そして、お燐は自らの背にも炎の翼を宿し、一気に舞い上がった。空中で静止し、自由落下を始めようとしていた蘭丸の真横に並び、そして小太刀に宿った炎のエネルギー全てを空に放つ。

お燐「奥義『鳳凰爆炎衝』っ！！！！」

お燐の言葉の通り、その炎は空を焼き尽くした。一気に爆発した炎の力はとてつもない勢いで燃え広がり、僅か一秒も待たずに彼女が剣を振るった範囲の七倍以上にも膨れ上がった。炎は雨となり、周囲に落下し信長の真上にも降り注ぐ。刀でそれを振り払うと、彼女は炎の中心から落下する蘭丸を追う。

信長「お蘭！！！！」

地面に叩きつけられる寸前で何とか彼を受け止める。あの炎の中にいたのだ、生きているはずはないと思いきや、蘭丸は意識こそ失っているものの、まだ息はあるではないか。炎の衝撃と熱で焼かれ

たのか、刀は砕け散り、破片があちこちに落下する。

信長「お蘭め……刀を盾にして生き延びおったか。——さすがは我が剣……よくやったぞ」

信長はマントを外し、蘭丸にそっとかける。そして、ようやく降りてきたお燐を見て、笑う。やはり貴様こそ、我が物とするに相応しい。お燐はその言葉を聴いて、何か妙なものを感じていた。

お燐「お姉さん、もしかして……」

信長「さあ、今度こそ俺と決着をつけようじゃないか！」

日本刀と西洋剣の二刀流。それを見たお燐は、ちょっと待つのだと焦る。彼女の手には何も武器は握られていない。——そう、鳳凰爆炎衝の破壊力に耐え切れなかった小太刀は容易く砕けてしまったのだ。今の彼女は完全に丸腰である。

信長「問答無用！」

お燐「そ、それは酷いのさっ!!」

爪を立てて、信長の剣を迎え撃つ。しかし、本気の信長には最早お隣の爪など通じない。完全に押し返され、とうとうその場で転ばされてしまう。

信長「さて・・・お蘭の分を取り返さなくてはな」

お隣「ちょ、さっきの男の子はまだ死んでないのさっ!!」

信長はそれを聞いて笑う。

信長「だが、あのケガでは数日は動けまい。――その分を取り返す、と言ったのだ」

体で払ってもらうぞ。信長は刀をお隣の首のすぐそばに突き刺した。そして、それをクロスするように傾け、お隣が起き上がろうものならそのまま首が切れるようにセッティングし、お隣の動きを封じた。

そして、信長はお隣の着物の隙間に手を入れたのである。

お隣「なっ!?! ちょ、ちょっと! なにしてるのさっ!?!」

信長「言っただろう? お前は俺の物になると。安心しろ、俺に任

せておけばすぐにでも気持ちよくなれるぞ」

おりん「ちょ、モノにするって、そういう意味!？」

信長「ふふ・・・剣の腕では一流だが、ここはまだ三流と見た」

おりん「うっ!! 嫌なのさうっ!!」

手足だけじたばたさせて抵抗するお隣。しかし、頭を少しでも動かせば命の危険さえある。それに、この状況下では信長のさじ加減一つで、この刃をそのまま落とされるかもしれない。それに、異常なまでの信長の腕力を前に、この体勢と状況では明らかに力不足。結果的に抵抗虚しく、とうとう着物も一枚残らず剥ぎ取られた。

信長「さあて・・・どこからいたどころか・・・」

お隣「め、目がマジなのさ・・・っ!!」

信長「お蘭が動けない数日は、お前で楽しませてもらうぞっ!!」

???「この、変態女ア——っ!!!!」

空から矢が降り注ぐ。その一本を掴み、信長は空を見上げた。空には弓を構える文とその背にしがみついているさとおり。

文「その子から離れなさいっ!!」

文が再び矢を放つ。信長は地面に刺した刀を抜き、そこから真空の刃を飛ばす。文はそれを回避し、高度を落としてさとおりを降ろす。そのまま一気に信長に接近し、今度は手から竜巻を起こして信長を吹き飛ばす。

文「くらいなさいっ!!」

信長「そんなチンケな風一つで！」

西洋剣で風を受け止め、信長は文を追う。その隙に乗じてさとおりはお隣に近づいた。

さとおり「——大丈夫かしら？」

お隣「酷い目にあつたのさ・・・」

さとおり「後は私に任せて頂戴」

お隣「・・・お姉さんは、何者なのさ？」

お隣の問いに、さとりはそうねえ、と少し考える。そして、何か思いついたのか、ああ、と言葉を続けた。

さとり「バカを討つバカよ」

頃合か、と文は一気に上昇し、信長から距離を取る。そして文に代わってさとりが信長に切りかかる。

信長「貴様ごとき、俺の相手になれるのか!？」

さとり「甘いわね。——天下の織田信長が、分からないのかしらっ!」

その太刀筋は、的確に信長を捉える。昨日の御前試合とはまるで異なり、信長の隙の無さなどまるで恐れてはいなかった。

信長「なんだ、何だお前はっ!？」

さとり「幽霊の正体見たり——ってね。その力の由来さえ分かれば、あなたなんて敵じゃない」

信長の反撃を鮮やかにかわし、そして反撃の一太刀。信長の日本

刀を砕き、さとりは刀を下段に構えなおす。

さとり「あなたの能力——それは『馬鹿を極める程度の能力』・・。バカってのはね、ありえないことをいう人間や、出来るはずもないようなことをする、現実を見ていない奴を言うのよ。——でも、そのありえないことを実現できる可能性を持っているのは、それをやろうとするバカだけ。普通の人なら出来るわけないって諦めるようなことも、あなたはこの世界に呼び出してありえることにしてしまえる」

さとり「でもね、その天才的なバカには、弱点があるのよ」

刹那、さとりの姿は消え失せる。周囲を見渡す信長。それをあざ笑うかのようにさとりは彼女の目の前に現れて一太刀浴びせたのだ。

さとり「その力は、バカには通用しない」

さとりの剣は体を裂く寸前で手前に引かれていた。薄く切られた腹部に血が滲む。それを見て、彼女はふ、と鼻で笑った。

信長「お主も、俺と同じということか・・?」

さとり「まさか。私はあなたほどバカじゃないわ。ただ、考えることと恐れることをやめただけ」

信長の心が読めなかった理由。それは、彼女の常識外れな思考に、さとの脳がついていけなかったため。もとより言葉が通じない相手の思考を読んでも意味などないのだ。だからこそ、相手の考えや思考なんて気にも留めず、ただ真っ向から自分の腕だけで戦う。それが信長と戦うためにさとりが導き出した答え。常識外れの馬鹿に、彼女は真っ向から常識で立ち向かったのだ。

さとり「武士が刃を交えるのに、言葉や理屈なんて要らない。まさしくあなたらしい、バカな武士道よ。でも、理屈を知っていないと見切れない刃もある。あなたには、私の剣は一生見切れないわよ」

信長「……よく分からんが……。どうやら俺の負けのようだな」

折れた刃を捨て、信長はさとりを見る。
そして言う。まさしく剣帝だ、と。

蘭丸「……ん。あれ、ここは……？」

信長「おお、お蘭。目覚めたか」

蘭丸「・・・炎の剣客は!？」

蘭丸は起き上がり、周囲を見渡す。すると、テーブルのほうにさとりたちがいるではないか。その中にお燐を見つけ、もう一度勝負です、と蘭丸が言う。

お燐「な、何の勝負をするのさっ!？」

蘭丸「そんなの決まってます! 今度こそ、私の剣を突き刺してあげますっ!!!」

お燐「そ、そんなのダメなのさっ!!」

お燐は顔を真っ赤にして文の後ろに隠れてしまう。文は笑いながら子供は無邪気でかわいいですねえ、と呟く。

さとり「・・・蘭丸くん」

蘭丸「さ、さとりさん!? どうしてここに——って、今はそうじゃありません! 炎の剣客を私の剣で——」

さとり「どこのなまくら刀かしら? そこの小太刀は」

そう言って、蘭丸の下半身のほうを指差す。そして、その時、ようやく彼は気づく。

蘭丸「って、ええっ!? 何で私、服着てないんですか!？」

お燐「ご、ごめんなのさ・・・あたいの炎で燃やしちゃったのさ」

蘭丸はその場にしゃがみこんで前を隠す。さとりは気にしないからそのままぶらぶらさせておきなさい、とテーブルに頬杖ついて半笑い。文も別に裸ってわけじゃないんですからいいじゃないですか、とニヤニヤしている。

蘭丸「私、裸じゃないですか!! ——っていうか代わりの服とかないんですか!？」

文がふふ、といたずらっ子のように笑っている。そして、その後ろでお燐がぽそっと呟いた。

お燐「か、かわいいタートルネックを、被っていたのさ・・・」

蘭丸「・・・」

お燐「服・・・あたいのでよかったら貸すのさ」

蘭丸「・・・お願いします」

蘭丸は半泣き。信長は自分のマントを蘭丸に被せ、あまりからかってやるんじゃない、とさとりを睨む。

信長「男はたつてからの大きさが勝負だからな」

さとり「ギリギリの発言はよしなさい」

文「・・・に、しても。まさか信長様がそういう趣味をお持ちだったとは」

信長「む・・・。仕方なからう。戦場には弱い者を連れて行くわけにはいかん。強く、かわいい子こそ、俺が求める最高の相手だ」

さとり「要するに、かわいい戦力なら、性別も種族も関係なし、か・・・。その飽くなき性欲には脱帽ね」

文「同感です。——女性なんですから、もう少し慎ましくしましょうよ」

信長「ふ・・・。甘いなお前たち」

戦場は魂が高揚する場所。その猛りを沈めるために必要なのだ。
信長の言葉に、さとりはため息をついた。

さとり「だったら、自分で沈めてればいいじゃないの」

信長「それでは、一生満足できん」

文「・・・いや、あえてツツコミませんよ?」

さとり「・・・とりあえず、お隣は私たちが連れて行くわよ。あなたに任せたら変なところに火がつくかもしれないからね」

信長「うむ。——もはやあやつには興味はない。好きにすればいい」

その言葉に、文はどうしてですか、と訊ねる。

信長「俺は股に毛のない者が好きなのじゃ」

文「・・・聞いて損しました」

信長と蘭丸は、それから少ししてから安土城に帰っていった。お燐は、さとりと共にいくことを承諾し、新撰組の仲間となった。そして、舞台は幻想郷の中心・・・幻想幕府へ。

次回予告

光圀「ワシは、お主と戦ってみたかった——っ！！！！」

忠勝「天下の副将軍がお相手とは痛み入るっ！！」

———そんな二人はさておき。

吉宗「薬は全てよい物とは限りません。中には人を殺しうる毒もあ

る」

お空「うにゅ——よくわかんない」

永琳の補佐役、徳川吉宗。

彼の者、歴史の闇の中でも、暴れん坊。

さとり「こそこそと何をやっているのかしら、お坊ちやま?」

吉宗「あなたの命、ここで奪わせてもらいます」

次回、ソードマスターさとり『熱闘編』・第四話

『蠢く者』

剣帝と剣聖。二人の鬼が交わる時、物語は動き出す。

第三話・炎の剣客（後書き）

最後はあっさりと締めました。

この理由はエピログを宣伝用エピソードとしてブログに投稿する予定だからです。エピログを公開したら、数日後にこちらにも同様の内容のものを投稿しますので、ブログを見ていない方もご安心ください。

近江編は今回で終了です。次回からは幻想幕府編です。

幻想郷キャラに加え、時代劇などでも有名な方々が登場する予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9575q/>

ソードマスターさとり『熱闘編』

2011年10月6日19時25分発行